

日時 令和四年十月九日（日）十二時三十分開場・十三時開演
場所 みどりアートパーク緑区民文化センター（長津田駅北口）

第二回演奏会

雅會

主催 西 雅會
会主 佐和美

一、富士山	二、明治松竹梅	三、淀君絵巻一 ちりぬる花の段
四、四季の眺	五、独楽と毬	六、櫻の宿
七、道成寺黒髪供養 第三部	八、虫の音	九、八岐の大蛇

富士山

草野心平
二代上原真佐喜
作詞
作曲

箏高音 会主

上原佐和宏

小野佐和希

箏低音 永吉佐和次

中村佐和知

歌詞

麓^{ふもと}には桃や桜や杏^{あんず}さき むらがる花々に蝶^{ちょう}は舞^まい
億^{おく}万^{まん}万^{まん}の蝶は舞い 七色^{なないろ}の霞^{かすみ}たなびく

夢みるわたくしの 富士^{ふじ}の祭典^{さいてん}

くるりいちめん花はさき くるり一面^{いちめん}蝶は舞^まい
昔からの楽器のすべては成りだすのだ

種蒔^{たねまき}きのように鳥はあつまり

日本のすべての鳥はあつまり

楽器といっしよに歌っている

(夢みるわたくしの富士の祭典)

七色の霞は雪に映^はえ

七色の陽炎^{かげろう}になつてゆらゆらする

鹿や猪や熊や馬 人もいないか人もゐるゐる

ひょうたんの酒や女の舞い

標野^{しめの}の人も歌っている)

あ、夢みるわたくしの 富士の祭典

遠く大雪嶺^{たいせつれい}からは黄鳥^{ちゅうよう}が

使者になつて花を啣^{くわ}へて渡ってくる

三つの海を渡ってくる

菊 塚 検 校 作 曲
明治松竹梅

箏高音 会 主

小野佐和希

箏低音 永吉佐和次

中村佐和知

尺八 榎 慧山

水町 芳山

歌 詞

風の音は、静まりはてて千代を呼ばふ、
田鶴がね高し峯の松原。

栄えゆく、御園生の松に雛鶴の、
千代の初めの声をきかばや。

この上に、幾重ふりそふ雪ならむ、
竹むら高く成りまさりつつ。

立ちかへる、年の旭に梅の花、
かをりそめたり雪間ながらに。

大君の、千代田の宮の梅の花、
げにはころびむ年の始に。

新玉の、年の始に梅の花、
見る我さへにはほ笑まれつつ。

新しき、年の祝ぎごと言ひかはし、
袖にもかをる梅の初花。結びの手

石川 潭 月 作詞
二代上原真佐喜 作曲

淀君絵巻一

ちりぬる花之段

箏高音 会主

上原佐和宏

小野佐和希

中村佐和知

箏低音 永吉佐和次

鼓 神山喜美重

箏 策 三浦 元則

歌詞

あわれ一枝を小袖に折らば はんらと散りぬる
花は醍醐だいがの 花は醍醐の眺めよの

いよ、いよ、の 太閤たいこうさまの御乗物おのりもの 三宝院の
御門をくぐる お手懸衆てかけしゅうのお興こしもまゐる

一に政様まへさま 二に淀の方 三に松の丸様
四に三の丸様 踵ついで五丁め加賀様よ

さても きららの五具え やんれ
きららかよの

咲いた桜に誰が衣掛きぬかける 枝はかくれる
花は散る 散る散る散るぞえ長柄ながえの傘に

浅葱あさぎ むらさき 猩々しょうじゅう緋 萌ゆる若草 黄金色こがねいろ
五つ 五つ色 花の顔

中に一きわ品も佳し 上枝に咲ける十返りの
花の姿や 松の丸

此方こなたは時めく花かづら 咲くも憂し 散るもつらや

色に出て匂いめでたき 淀の方

見えつ かくれつ花さかづきの盃 いないな先まずは
この松の丸 何れいずも様は花ずいしんの隨身よ

さなの宣たまいぞ 吾われは秀頼の母なるぞ
わが盃はいよ 吾から と

互たがいに先を争きいて
面おもてにはんのり朱桜 女子おんなこ同士の布引桜

雲井桜くもいのあやうしと政所君まんじころぎみ いざ桜

仲を虎の尾 有明桜ありあけ さればめでたく奈良桜なら

歌仙桜かせんざくらの水茎みずぐきや

花もまた君の為とて咲出いでて 世にならいなき
春に逢あうらじ

謡い候え 囃はやそうづ 御舞いあれや 花の友

幕にそよと山風は ひとときに花を譲りの
妙たえなる鈴 響きに酔うて霞に入相いりあいの 花は七日なぬかに
豊臣の さだめなるらし宴うたげなる哉かな

さだめなるらん宴なる哉

四季の眺

松浦 校
八重崎 校
作曲
箏手付

箏

堀江久美子

井上よし江

三 絃

村田 祥子

尺 八

飯島 輪洋

古越 輪笙

梅の匂ひに柳もなびく、春風に、

桃の弥生の花見て戻る、ゆらりゆらりと夕霞

春の野がけに芹蓬、摘みかけたるおもしろさ（合）

里の卯の花田の面の早苗、色見えて、

茂る若葉のかげ訪ひ行けば、まだき、（合）

初音の山ほととぎす、ひと声に、（合）

花の名乗りも忘れられて、家包に語らばや。（合）

〔手事〕

〔チラシ〕

草葉花づき野菊も咲きて、秋深み、

野辺の秋風つゆ身に滲みて、ちらりちらりと村時雨、

よしや濡るとも紅葉葉の、

染めかけたるおもしろさ。（合）

野辺の通ひ路人目も草も、冬枯れて、

落葉しぐるる木枯の風、峰の炭がま煙も淋し、

降る雪に野路も山路も白妙に、見渡したるおもしろさ。

独楽と毬

二代上原真佐喜 作曲

三 絃 会 主

箏 高音 上原佐和宏

小野佐和希

中村佐和知

箏 低音 永吉佐和次

むかし／＼お子達の

玩具の箱に 独楽ひとつ

手まり ひとつが住いたり

独楽の袴はだんだら模様

くんるくる／＼紅がら色と

くんるくる／＼墨の色

てんでん手まりの晴小袖

色は青柳 緋の牡丹

浅黄桜や 八重山吹に

うす紫の 五彩糸

ポンとはずんで 一二三四

まりの姿に うつとりと

いつか 女夫になる夢を

描いて 独楽は 物思い

くる／＼舞うも逢瀬なや

柳の枝をつばくろが

すいと くぐって飛びかえば

まりの心は ときめいて

胸もはずんで 一二三四

まりは はづんで軒の端の

つばくろの巢へ お嫁入り

独楽はしょんぼり 柳かげ

枝がなぶって くるくるり

独りぼつちが 淋しくて

独りぼつちが 悲しくて

今日もくるくる

くんる くる くる

石川 潭 月 作詞
二代上原真佐喜 作曲

櫻さくら

の

宿やど

立方

喜多流

神山喜美重

箏高音 会 主

上原佐和宏
箏低音 永吉佐和次

尺八 山戸 朋盟

歌 詞

堤中納言物語『花櫻折の中將』より

さる程に 少將は 月の光に 謀^{はか}られて

夜ぶ深う行けば 花の枝

梢はひとつ 匂うばかりに霞けり

櫻の宿とこころづき

年ごろ 心かよわする

女^{ひと}や如何にと 問いければ たずぬる人は

既になく 破^やれし築^つ地に花の散る

幻か 花の曇りか透^{すい}垣^{がい}に

ほの色見えて懐かしき

袒^{あこめ}めすがたも艶^{つや}やかに

うちすきたる 髪^{かみ}の裾

小袿^{こづき} 映^はえてなまめかし

扇をば

花散る方にさしかくし

あたら夜の月と花とを同じくは

心知れらむ人に見せばや

舞いの姿はいつしかに

消えて儚^{はか}なき 春の夜や

櫻多くて 哀れげに

荒れたる宿に 少將の

昔を偲^{しの}ぶ 姿かな

散る花を惜しみとめても 君なくは

誰にか見せむ 宿の櫻を……。

二代上原真佐喜 作曲

道成寺黒髪供養 第三部

箏高音 会 主

中村佐和知

箏低音 永吉佐和次

尺八 西川 皓輔

〔前弾〕

それ人皇四十二代、文武の帝勅願にて、

大宝元年あらたかに、空も日高の靈地を定め、

一寺建立の詔みことのり（合）父母恋し国恋し、

恋にはあらぬ黒髪の、海人の乙女を慰めに、

紀大臣道成公、僧正義淵仰せをかしこみ、（合）

一丈二尺の仏像を、一刀三礼刻みつつ、

かの親世音をみ胸に納めつ、鎮護国家の道場に、

開く桜や曼荼羅華まんだらけ、ありがたくもまた類たぐひなき。

（合）

父母に孝順きょうじゆんし、供養する（合）

功德の果報は、一生補処ふしよの、菩薩の功德と等しきなり。

（合）

黒髪供養はなやかに、（合）今も名に負ふ道成寺、

乙女の春を讃へ讃へて。

藤 尾 句 当 作 曲
虫 の 音

箏 高 音
松 岡 瑞 蓉

鏡 文 博

松 下 瑞 光 蓉

箏 低 音
金 子 博 栄

三 絃 鏡 範 之

金 子 博 詩

尺 八 山 田 都 久 山

思ひにや、焦れてすだく蟲の声々さ夜更けて、いとど淋しき野菊に
ひとり、道は白菊^{しらぎく}たどりて此処に、合 誰をまつ蟲亡き面影^{おもかげ}を、慕ふ
心の穂にあらはれて、萩^{はぎ}よ薄^{うす}よ寝乱れ髪^{かみ}の、解けてこぼるる涙の露
の、合 かかる思ひをいつさて忘りよ、合 兎角^{とかく}輪廻^{りんね}の拙^{つたな}きこの身、晴る
る間もなき胸^{むね}の闇、合 雨の合 降る夜も降らぬ夜も、通ひ車の夜母^{よはは}に來
れど、合 逢^もふて戻れば一夜が千夜、合 逢はで戻れば又千夜、合 それそ
れ、それじゃまことに、合 ほんに浮世^{うきよ}がままならば、何を怨みんよ
しなし言よ、合 桔梗^{ききやう}、刈萱^{かりあし}、女郎花^{ぢやうがは}。我も恋路^{こひぢ}に名は立ちながら、
一人まろ寝の長き夜を、合 手事^{てし} 面白^{おもしろ}や、干草にすだく蟲の音の、機
繰る音のきりはたりてふ、きりはたりてふ、つづれさせてふ、きり
ぎりす、ひぐらし、いろいろの色音^{いろね}の中に、分きて我が忍ぶ松蟲の
声、りんりんりんりんとして、夜の声めいめいたり。合 すはや難波
の鐘も明け方^{がた}の、朝闇にも成りぬべし、さらばや友人^{ともびと}名残の袖を、
招く尾花もほのかに見えし跡たえて、草茫々たる阿部野の塚に、蟲
の音ばかりや残るらん、蟲の音ばかりや残るらん。

石川 潭 月 作詞
二代上原真佐喜 作曲

八岐大蛇

箏高音 会 主
箏低音 永吉佐和次

歌詞

扱も出雲の國は肥の河上 鳥髪の夜は更け渡る
谷深うして峰聳え木立の枝も展ごりて

薦も蔓も天にはう

爰に速須佐男の命は櫛名田此売を助けんと

八岐の大蛇の出現を巖の陰にまちたもう

時に黒雲巻き起こり鳴神稻妻 山鳴り振動

雨の脚 時こそ来たれと待つ折柄

八重の黒雲かき分けて 高志の八岐の大蛇の姿

吾はこの河上に年経てすめる大蛇なり女をとくと

出すべし今宵の贄は何処と紅花の舌をふりたつれば

また吹き下ろす山風に酒の薫りにひきとどめられ

八つの假疵の酒ふねに八つの頭を乗り入れて

八塩折の酒飲みいたる

姿は一つ影は二つ三つ四つ五つ

(こけむして八谷を廻る八つの尾は 血汐したゝる

ばかりなり いで櫛名田此売を取らんとせしが

飲んで乱るゝ酒船の 流れは滝つ瀬 響きは雷電

落ちたる雨は夜霧とたちこめ 頭をもたげ面をか

くし乱れは八つ心は一つ 返す返すも凄まじや

命は今ぞと飛び出でて十掣の劔を抜きはなち)

『吾こそは天照らす大御神の弟なり』と

日いい切りかゝる

八つの形げんぜんとして吐く息巖を穿ち

古木を倒し眼の炎は木の葉を焼き鱗を鳴らし

角をふりたてふりたてゝ雲を巻き上げ巻下ろし

まとわりつかんぐくンるくるくる

東南西北山覆えし河水還つて大地をけだつ

追い廻り追い廻り 切つて放れば忽ちに

肥の河の水となつてどうどうどうと流れゆく

はや静まれる鳥髪に 命は八岐の大蛇より

草薙刀の劔と櫛名田此売を

めでたく得させ給ひける

賛 助 出 演

山田流

鏡 範之

鏡 文博

金子 博詩

金子 博栄

松岡 瑞蓉

松下 瑞光蓉

生田流

井上よし江

堀江久美子

村田祥子

尺八

飯島 輪洋

西川 皓輔

古越 輪笙

榎 慧山

水町 芳山

山田都久山

山戸 朋盟

(敬称略・五十音順)

箏 三浦 元則

立方・鼓

神山喜美重

司会

保坂 雅凜

舞台構成

聖邦 堂

菊屋楽器店

「雅會」連絡先

〒227-0043

横浜市青葉区藤が丘

一ノ五四ノ四

☎ 045-1973-2251